

# 第1回「生活と仕事に最も近い場での医療：プライマリヘルスケア(PHC)」



大阪大学医学部医学科・大学院医学系研究科(国際未来医療学)

## 佐伯 壮一郎

キャリア甲子園2015(総合優勝)、2018年株式会社ワークスアプリケーションズ春インターンシップ(最優秀賞)、第9期高校模擬国連全日本代表団などを経て現在。双生児研究(Twin Research)など疫学的手法を用いて世界の健康長寿に貢献したい。

### 先人から学ぶ 「プライマリヘルスケア」

1978年のアルマアタ宣言で提唱されたプライマリヘルスケアという概念は、医療の第一のステップであるとともに、社会開発事業の一部であるとも言えます。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)以前のグローバルヘルス界限では、この概念はいわゆる低取得国の医療協力における重要な概念として認識されていました。しかしながら、COVID-19を通じてニューヨーク、イタリア、そして東京などといった高取得国の一部でも、適切な医療が必要な患者に行き渡らずに失われた命もありました。COVID-19により世界中でのプライマリヘルスケアが崩壊したともいえ、医療のあり方を考え直すきっかけともなりました。

その一方で、アルマアタ宣言の前からプライマリヘルスケアの概念に則った活動は数多く行われてきました。今回のKGHの集いで紹介された事例としては、話題提供者として登壇した中村安秀さんが設立された認定NPO法人HANDSによるパプアニューギニアの山奥の農村での活動や、スマナ・バルアさんによる佐久総合病院における近隣住民とともに医療従事者を教育する活動など、世界各地で実践されてきたと言えます。これらの活動に共通している信念は、政策から健康改善に取り組むのではなく、現場の声を聞くことで初めて有効な医療が提供できるという思想です。国際保健のみなら

ず国際協力の概念の根幹にあるこの原則こそ、この混沌とした社会の中で重視されるべき視点ではないでしょうか。

### COVID-19を通じて 保健医療体制を見直す

とはいえ、COVID-19により崩壊した医療を再構築するためには、プライマリヘルスケアという概念をさらに拡大して思考を深めていく必要があります。プライマリヘルスケアは医療だけに囚われた概念ではなく、平和を希求する概念でもあります。包括的な医療体制を立て直すために、中村安秀さんからは「ポスト・コロナ時代の日本の医療への処方箋」と題し、図に示すような具体的な提案がなされました【図1】。

### イノベーションと温故知新

災害大国とも呼ばれる日本は、今まで数々の災害から立ち直ってきた歴史を有します。世界を揺るがしたCOVID-19からも私達は立ち直らなければいけません。しかし、それだけでなく、将来このような感染症の蔓延に対しどのように立ち向かうのかという礎を築き上げるべき時期は今でしょう。人類、全動物、いや全生物の数よりも地球に存在するウイルスの数のほうが大きいわけです。より強くこの状況から立ち直るためにも、この教訓を生かさなければいけません。

とはいえ、問題解決のために「イノベーション」に過大に期待することは避け

### ポスト・コロナ時代の日本の医療への処方箋

1. 医学部から独立した「公衆衛生大学院」
  - ・真の意味で文理融合した学際的なアカデミック環境
  - ・「Health Policy(医療政策学)」の人材育成が必要
2. 保健所・市町村保健センターの人材の増強
  - ・公衆衛生マインドをもつ医師の育成
  - ・保健師・助産師の大量の雇用
3. セイフティ・ネットとしての災害に強い「公衆医療体制」
  - ・災害・感染対応できる地域医療機関への財政支援
  - ・国民皆保険制度で、予防・健康増進もカバーすべき
  - ・教育と医療は長期的な視野で継続(近視眼的効率ではなく)

図1 中村安秀さんの講演資料より

るべきではないでしょうか。イノベーションとは、過去の既成概念を破壊し、その上に新しいものを創造するという発想で、ここ10年余りで非常に持て囃されるようになった考え方です。確かに従来からの思考法に凝り固まっていただけではこの驚異に立ち向かうことはできないかもしれません。しかし、最近の傾向として、過度に既存のものを破壊していくという部分のみが強調され、適切な創造がなされていないような状況が世界各国で認められる印象があります。そして、世界も徐々にそこに辟易しているように感じます。

ですが、幸いなことに、医療は人類が生存し始めた当初から蓄積された莫大な知恵と経験に基づいているわけです。今回のプライマリヘルスケアのように、過去から学ぶべきヒントは多数あります。その過去のメッセージを尋ね、耳を澄ます。その上で適切な議論を構築していくような取り組みこそ、世界が求める未来の医療に近づく最短の道のりではないでしょうか。